



episode 12 やさしい言葉を選ぶ我が子が、私の誇り

投稿者 知勝 さま(島根県)



『ぼくは川のように話す』
 ジョーダン・スコット 文
 シドニー・スミス 絵
 原田 勝 訳
 偕成社 2021年

私には、大切な子どもがいる。

今思えば、首が据わるのも、歩くのも、おむつが外れるのも、少し遅かったように思う。

あの頃は子育てが初めてで、いつも自分を責めていた。

子どもはみんな違って当然なのに、うちの子もだけができないと思ってしまっていた。

それでも少しずつ成長していき、1歳の誕生日から数日後には、突然歩き始めた。

おむつも、幼稚園に入園する2週間ほど前に卒業した。私の不安は、徐々に減っていったように感じた。

しかし、それは甘かった。成長とともに、違う悩みや不安に直面する。

そして、時間は過ぎ、不安だらけの学校生活がスタートした。毎日、学校で泣いていないか心配していた。

そんな日々の中、出会いは突然、訪れた。

『ぼくは川のように話す』という絵本を、子どもが持って帰った。

子どもに読み聞かせをしながら、衝撃を受けたのは私の方だった。読み終わると、これまでの日々を反省した。

不安ばかりが先行して、子どもの気持ちに寄り添えていなかったように感じたからだ。

絵本の中の父親は、私とは違った。子どもに、そっと寄り添っていた。

心配するについ、口数も多くなってしまった。

しかし、言葉を交わさなくても、同じ空間や時間を共有することで、心が安らぐこともある。

人前で話すことが苦手で、友達に自分から話しかけることも、挨拶することさえ緊張してしまう我が子。

だからこそ、言葉には人一倍の関心があるらしい。

話し言葉で伝えられなくても、書くことで自分の気持ちを吐き出している。

休み時間に毎日、お絵描き帳に自分の気持ちを書き、一冊の物語にして私にプレゼントしてくれた。

それは、学校で出会った虫や花との静かで賑やかな日常だった。私にとっては、史上最高傑作となった。

我が子の夢は、作家になること。いつか夢が叶ったら、私が出会った素敵な絵本の一冊として紹介したい。

優しい言葉を選び、相手を傷つけない我が子が、私の誇り。

「絵本の日アワード in FUKUOKA 2022」投稿作品より



本連載は「医療法人元気が湧く」が主催する“絵本の日アワード”に応募された作品を掲載していきます。毎年、300～450編の応募がある「絵本にまつわるエピソード」の作品から、「絵本の魅力」と「絵本のチカラ」のつまったエピソードを選び、その魅力と感動を読者の方々にも共有していただきたいと願って、投稿者の了解を得て紹介しています。

さらに、人に影響を及ぼした絵本のバックグラウンドについて、司書の専門的な視点による解説を加え、一冊の絵本のある部分では“深く”、そしてある部分では“広く”、興味を広げていただきたいと企画しました。



世界的に評価されている新しい絵本

アメリカ図書館協会は“シュナイダー・ファミリーブック賞”として、「障害をもつ体験を芸術的な観点から描いた作品」を2004年より表彰しています。2020年9月初版発行の『I Talk Like a River』が、2021年に授与された賞です。この本は他にも、ポストグローブ・ホーンブック賞、ニューヨーク・タイムズ最優秀絵本賞、米国外でも、ドイツ、イタリア、オランダ、中国、台湾などで賞を重ね、高い評価を得ています。

日本では、2021年7月に邦訳版『ぼくは川のように話す』が刊行されると、第69回産経児童出版文化賞の翻訳作品賞を受賞しました。

発行から僅かの期間で数々の賞を受賞した『ぼくは川のように話す』の作者は、カナダの詩人ジョーダン・スコット氏です。詩人が初めて手掛けた絵本は、瞬く間に世界的な評価を受けたのです。

映画のような絵本体験をどうぞ

本作は、吃音に悩んだスコット氏の実体験から生まれた絵本です。スコット氏が詩的につづった美しい文に絵を付けたのは、同じカナダ在住の絵本画家シドニー・スミス氏です。

スミス氏は、カナダ総督文学賞やケイト・グリーンウェイ賞、エズラ・ジャック・キーツ賞と権威ある3つの賞の受賞歴があり、本作を含む4作でニューヨーク・タイムズ最優秀賞を受賞した、世界で注目されている絵本作家です。『ぼくは川のように話す』を読む者は、映画のような映像世界へ引き込まれ、ことばを伴って自身の精神世界を開く体験をすることでしょう。

本作では、スミス氏が光と影を巧みに表現したことで、テキストとイラストが互いを引き立てるような芸術作品となっているのです。

頭に浮かぶことばをうまく話せないスコット少年を川に連れて行った父親が水を指さし、「おまえは、川のように話してるんだ」と示す場面では、文字だけ

読んでもイメージに及ばない「川」の流れを、スミス氏の絵が重なることによって、読む者の脳裏に、緩急に流れる川の情景が動き出し、スコット氏のことばが胸にズシンと響くのです。

少年の生まれ変わり譚なのです！

憂うつなスコット少年を救ったのは、父親だったと本書のあとがきで告白しています。スコット氏は「父が吃音を自然の中の動きにたとえてくれたおかげで、ぼくは自分の口が勝手に動くのを感じるのが楽しくなりました。吃音は怖いくらいに美しい。なめらかな話し方になったら、ぼくではありません」と言い切っています。

この物語は、父親の発した美しいことばとの出会いによる少年の生まれ変わり譚なのです。本作が高く評価されているのは、芸術的なことばと絵に加えて、等身大の親子の姿が描かれていることにあるでしょう。すなわち、家族の支えや理解が、子どもにとってはとても大切という気づきがあることです。

このビタミン剤は繰り返すほど効果的です

本作はQOLを高めるツールとして、医療現場には必須の一冊だと推奨します。吃音だけでなく、ものごとがスムーズにできないことにジレンマを抱く子どもたちと、そんなわが子の姿に悩む保護者たちを、ことばと絵のイメージで救う芸術的なビタミン剤となるでしょう。

発達に悩みをもつ人に限らず、誰しもが抱えている劣等感やコンプレックスの苦悩を溶かしてくれる力が秘められている絵本です。人はみな自分なりの川を持っていて、自分の川の流れのとおり生きていて教えてくれるのです。

『ぼくは川のように話す』は、小児歯科での相談に活用できる処方箋なのです。

文献

- 1) ジョーダン・スコット 文、シドニー・スミス 絵、原田勝 訳：『ぼくは川のように話す』、偕成社、東京、2021。
- 2) 偕成社：『吃音の詩人を救った、少年の日の、父からの言葉とは？』絵本『ぼくは川のように話す』、PR TIMES <https://prtimes.jp/> 2021/7/12。